
BIO HAZARD evolutionbreak[DEAR FILE]

シンラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B I O H A Z A R D e v o l u t i o n b r e a k 「 D E A
R F I L E 」

【Nコード】

N 1 0 3 6 Y

【作者名】

シンラ

【あらすじ】

1998年12月、T・ウィルスの恐怖が薄れ始めた頃。
その街はすでに悪夢と変わっていた…！情報が漏らされないように
閉鎖されたその街にある1人の青年が任務によって送り込まれる、
その青年はカゲハ。
これは彼の成長を記した物語である。

諸事情によりアカウントが変わってしまいましたが前にこの作品を

描いた作者です。作品の管理の為、もう一度投稿させてもらいます
がご了承ください。

任務「1」 離脱（前書き）

えー、前のアカウントがわからなくなってしまいました・・・（汗）
作品管理の為、再び投稿させてもらいますがいくつかの編集はしています。読んでもらえると光栄です。

原作に触れない物語としてこの作品は進んでいきます。

カゲハは普通の主人公ではありません。闇を抱え、闇に突き進む。
そんな主人公です。

任務「1」 離脱

〓 〓 1998・10月〓 〓

トウイルス流出により街全体が汚染

米軍が核爆弾に相当するミサイルを打ち込む滅菌作戦が実行され近代都市ラクーンシティーは壊滅した。

真実は隠蔽され、まさに証拠隠滅と言っているほどのこの事件は後々に世界中を混乱に陥れる

しかし、これは始まりに過ぎなかった

1998年 12月

ある1人の青年がいる。

彼の名はカゲハ・A・ジュティム

フランス人と日本人のハーフで、彼の在住していた所はずっとフランスだった

見た目は日本人だが中身はフランス人、彼の母親が日本語を教えながら暮らしていた。

そんな彼は今、ラクーンシティーの姉妹都市dearシティーで各国の警察のエリートを集めるプロジェクトに参加していた。

研修に参加をよぎなくされたのは当時彼は日本の自衛隊に属して

いたこともあり、フランスと日本の国籍を持つエリートとされていたからだ。

そして彼はそのよりすぐれた経歴で日本からの派遣としてDearシティーへの派遣を命じられたのだった。

「dearシティー」というのは米国のやや北側にある国で孤立した街でありながらその圧倒的な開発力でのし上がった近代都市で、バックには世界有数の有名企業アンブレラ薬品会社が着いている

フランス国籍の彼は今、日本からの特別な待遇を受け自衛隊に所属していた。

そう

それが今、彼として成り立っている表の顔

- - - 彼は「ある人」の部下

だが彼には「ある人」の所在など知らなかった。彼は任務を言い渡されただけでむしろこれが「ある人」の組織の入団テストのようなものだった

彼の知り合いのハンクという男の情報ではロックフォード島に行ったということを知っている・・・

今回彼に課せられた任務はd e a rシティーに潜入し、あるウイルスのサンプルを回収することそのあとすみやかに脱出する

彼は ある人 の忠実な部下

彼は ある人 の武器

彼は ある人 がいるから存在する

そして、これからどういうことが起きるかは予想はつく

これから始まる彼にまつわるこのレポートは彼にとって大きく変化をもたらし
任務にあった”あるウイルスのサンプル”は彼にはとてつもない因縁が存在する

そんな彼の正体、今から始まるのは彼の新たな人生の始まりでもあるのだから

12月、寒い冬であるが彼はその自衛隊の仲間たちと共にへりに乗り込む

自身の信じきる信念と計画と一緒に乗せ…

- - - - - 今

任務は始まる

空気がとても冷たい地域、ラスゴ山脈は高さこそないが車でくるにはあんまりお勧めできない

アメリカの基地に到着してからへりに乗せられ、操縦士含め総員24人は日本人だった

ただ、数人ほど除いては・・・

その一機に乗るカゲハ・A・ジュティムは現在へりで移動しているこれから向かうdearシティーはラクーンシティーに継ぐ近代都市で、もちろんアンブレラがすべてを支配していた。

建物から扱うものまで、人々はそれを疑問とも思わず暮らしていた。

霧で覆われたこの街は四方に巨大な壁で覆われ

さらに街の周辺には高い山脈があり車で来れるような所ではない。

この街の人口は約60万人、いわば一つに独立した国みたいなものだ

だが毎年行われていたこのプログラムのおかげで世界からの信頼が高い。だが、こうゆう街こそ何をやってるかわからないものだ。主に呼び出されるのはまず優秀な警官や研究員、医療関係のお偉いさんなんてものも今回は呼び出されている（この部隊とは違う方法で）

今回日本からは合計24人派遣され、各八人ずつでチームに別れへりに一機ずつ乗り込んでいる

カゲハはヘリの2号機で待機中

まわりはみんな日本人で、それぞれ自分の席で待機

カゲハは自分の席に座りながら外を見ていた
とくになにもない外だが、時を待つのはちょうどいい。

ふと、隊員の一人が立ち上がった
そしてカゲハほうへ歩きだす。

（隊員の一人がこっちへ来る・・・なんだ？）

隊員の一人がカゲハがいる席の隣に座った

「おい、大丈夫か？いつになく顔が真剣だぞ」
こいつは同じ警官として派遣されたたしか：サメジマと言ったな。

「いや、大丈夫だ。なんともないよ」

「そうか？緊張しているんじゃないかと思ったよ、お前日本に来て

からあんまり笑ったりしないからな」

ニカツとサメジマが笑う。この男はよくこうやって笑う、愛想笑いではない自然な笑いだ。

「そうかな？これから気をつけるさ」

ここで軽く笑ってみせる

もちろんこれは作り笑いだ

「まあ、そんな張りつめるなよ」

フツと優しそうな顔をし、また自分の席に戻ろうとする。サメジマにこの作り笑いが見抜かれたらしい。

サメジマはカゲハの肩をトンツと指で叩くと自分の配置についた

すると隊長が立ち上がり叫ぶ

「そろそろDearシティーだ！みんな準備しろ！」

窓をのぞくと街の入り口に巨大な壁があった。これがいわゆる住民を閉じ込める門だ。

それは街の周りを大きく囲い、これがあるために街へ入るにも出るためにもIDカードが必要とする

尚、街の出身者に関しては体のなかにマイクロチップが入っていて街での動きは衛星から見張られていた。

皮肉としかいいようがない街の住人には街のお偉いさんからは「君たちは町から守られているんだ安心したまえ」などと垂れごをほざかれている、衛星からの監視で街の住人は犯罪などという概念は存在しない。いつ、どこで、なにをしているかなんて調べれば一発でわかられてしまうからだ

常に街の全体的に霧がかかっているがこれは気候の関係で一年の大半が雨でたいがい霧雨なので街全体は常に霧がかかっている。

そんな街の上空を飛びながら、みんなは外を見て話している。自衛隊にも海外に遠征することがあるがこういうとこに来るのは稀である。

しばらく街の真ん中あたりを飛んでいるとあまりにも乗員がうるさいのでコマザワが立ち上がり隊員達に注意をしようとしたその瞬間…

ビー

ビー

ビー

操縦席のほうのスイッチがけたたましい音を立てる。

カゲハは時計を見た

予定通りの警報音

「どうした!？」

隊長は操縦席に向かっていく。

だが操縦士が青ざめた顔で叫んだ。すでにグラグラとへりは揺れ、エンジンの音がいつそう激しく響き渡る。

「エ、エンジンに異常あります。ほ、本機は不時着します!!!」

悲鳴のような操縦士の声と同時に急に高度が下がり始めた

乗員はパニック状態になっている

………

「ズン」

……ザー

「どうした!？」

一号機からの通信だ喋っているのはバレラ隊長らしい

「エンジントラブルです」通信のサカキが言った

・・・

ザ・・・ザザ

「ザ、ザー…ど…たザー…よく聞…な」

雑音と同時にバレラ隊長の声は遠のいていく。急な電波障害でもあるのかそれ以降通じなくなった。

ブツッ

通信が途絶える。

バババババババ

「おいおいおい、どこ行くんだよ。無視かよ……」

へりの音が遠ざかっていく

バレラ隊長の乗ったヘリは先に行ったらしい

こっちの安全が確認できたからなのか、こっちより優先することがあったからなのかはわからない。もうヘリは見えないところまで行ってしまった。

「…さあ、ヘリからでるぞ」

サカキはこれ以上この中に居ても無意味と悟ったのだろう。隊員達を外に誘導する。

若干ほこりが舞っているがどこにもぶつける事無く不時着できたみたいだった。

隊員達はどこどこぶつけていたが幸いケガ人はいない

「それにしても霧が濃いな」

サメジマは霧の濃さにとても驚いていた。なんせ一面白いモヤが広がっているのいるのだから仕方ない。

カゲハはまわりを見回しながら進んでいる

ヒュンッ

「！」

突然カゲハの前でなにか目の前を飛んでいく

「イタッ！」

誰かにそれが当たったらしい

「どうした？霧が濃くて何がどうなってんだか見えないぞ？」

「だ、大丈夫です」

どうやらサメジマにカゲハの目の前を通り過ぎていったものが当たったらしい、特に何とも無いようだが、この時サメジマの腕に何かにかまれた後がありそれをサメジマはその腕の部分をおもいきり掻き毟っていたことがカゲハは気になっていた

「そうか、なら先に進むぞ」

少し進むと街中へ出る、ビルこそないが古風なアパートが立ち並び妙に懐かしい所だった。

五分ほど歩き、隊員達は広場のようなところに入った。

「隊長…ちょっと…体が…」

サメジマが顔を蒼白にしてふらついている。

そんなサメジマを見た隊員達はその顔を見て驚いた
皮膚が所々かきむしったように荒れていて、顔は驚くほど白い

「おい、大丈夫か？」

コマザワがサメジマのほうへ駆け寄る

「さっき飛んできたヒルに咬まれた所が妙にかゆくて」

皆は首をかしげる

（ヒル？さっきのはヒルが飛んできてたのか？）

さっきカゲハを横切ったあの物体はヒルだったらしい

「……分かった学校にいたら検査を申し出てみよう」

「ありがとうございます……す？」

サメジマが言った途端にバタツと横に倒れた
鼻血を出し、瞳孔が開いている。

「だ、大丈夫か！？」

みんなが駆け寄る

「貧血か？」

「そんなヒルに咬まれた程度で」

「俺がおぶる、誰か荷物を持ってくれ」

隊長のコマザワがサメジマをおぶる

「少し急ぐぞ」

みんな小走りになって街の中を進んで行く

だが走っても走っても霧が濃くなっていくばかりであり進んでいくようには思えなかった。

「まずい、脈が荒くなってきた」サメジマをおぶっているコマザワが言った

「なら病院に連れていこう。緊急だ」

「でもここらへんに病院なんて…」

隊員がそう言った瞬間

フツと人影が見えた

それも一人じゃない 自分達の周囲にたくさんいる

「あ、そうだ」

ひらめいたように隊員の一人がその人影に近づいていく。

なにが起こるか知らずに隊員は人陰のところに行き、ぎこちない英

語で喋り始めた・・・

そのゆらゆらと揺れる人影、それはカゲハがよく知るものでもあった

「あの・・・こちらへんに病院はありますか？」

「……」

霧の中の人影は何も答えない
ゆらゆらと揺れているだけだ。

隊員はどこか間違った英語を使ってしまったか焦ったが特に問題はないはずと思いもう一度繰り返した。

「（？） すいません、こちらへんに病院はありますか？」

もう一度言ったが人影は同じようにただゆらゆらと揺れているだけだ。

「…」

「大丈夫ですか？」

あまりにも返答がないので隊員はもう一步近づいて言った。

ガッ！！

突然霧にまぎれた人影は隊員に覆い被さるように抱きつく。
先ほどのゆらゆらした動きからは想像できないような勢いで

「！？…え、なに？」

隊員はこの状況をまったく理解できず何もできない。

抱きついたのは男なのだが、さきほどから歩き方が変わったことは
カゲハだけが理解していた

カゲハは抱きついていて男の足を見た。その足は不自然なほど回転
していて足先が背中の方を向いている

隊員達が啞然としている中、男の口が大きく開かれた。

「？」

ガッ

隊員の両肩を握りしめ首筋にかぶりつく。

「!?!?」

口の奥のほうまでがつちり噛み付いている。その時の男の目はもはや人間からかけ離れたものだ。血走った目、もはやどこを見ているのかすらわからないくらい瞳孔が開いていた。

噛み付く齒は首の肉に食い込み、のど笛のほうまで噛み付いたところで男はいつきに顔を引き戻す。

肉は食いちぎられ、不自然な皮膚の「ベリッ」って音が離れていてもよく聞こえた。

首からは鮮血が飛び散る。食いちぎった断面からは筋肉のような赤黒いものが見えた。

その不可解な人物は隊員の身体を二口目、三口目、と貪っていく。

隊員達はただ目の前の信じられない光景を呆然と眺めていた。隊員は声にならない声を出しながら目を見開き、遅れてやってくる痛みと全身の痙攣が同時に襲う。

ボタン

ブシューーーーーー

かまれた隊員は血しぶきを上げながら地面に倒れた。

「ア…ア…アア…」

グチャ、バリ…バリ…バリ…

隊員の首を必死に食っている街の住人と思われる男

その倒れた隊員の血塗れの顔を見た隊員達の体からいつきに血の気

が引く

「うっ、うわああ！！！！！」

「化け物だあああああ」

一人が叫び、それに触発されたように他の隊員も叫ぶ。まるで端から恐怖が伝染していくようにパニック状態になっていく
コマザワは動揺する隊員を落ち着かせようと大声で叫んだ。

「落ち着け！！落ち着くんだ！！！」

「ひひひひひ！！！」

ついに隊員達は逃げようと走りだした
もはや尿が漏れ出していることなんて気にしなかった。

「待て！！どこへ行く！？！」

隊員の一人が霧の中へ逃げこもうと走る

ガッ

だが、逃げようとした隊員の腕を何かがつかんだ
ものすごい力によって走りは中断された。

「へ？」

その腕の先、まるで狂気に侵された恐ろしい顔の街の住人がいた。こんどは男や女もいる。

顔は驚くほど蒼白で、血まみれの人もある。だが、外見は普通にありふれた一般人だ。

しかし所々に噛み傷がある。衣服は鮮血が飛び散り、内臓がこぼれている者もいた。

再び悲鳴

その声は絶望に満ち逃げられない痛みが体全体に襲う。

それぞれ逃げた隊員を5、6人で囲み、次々とその醜悪な歯と爪が隊員の体を捉えていった

「ああああああああああ！！！！！！」

「ウア…ガア」

「嫌だ！痛い、痛い、いたあああ、あ、あ、あ……」

ボリ……ガリガリ……ゴキ……グチュグチュグチュ……

コマザワはさすがにこの街の異変に気付く

「しまった！お前ら密集隊形を取れ！！」

霧が濃く

人気のなかった街中で次々と人影が増えていく…

悪夢の再来

それは、この中でカゲハのみが知る真実だった

サメジマをおぶったサカキは今起きている状況に必死に対応しようとしているが、けっして冷静にはなれてない
だが無理もなかった、人が人を食べるなんてホラー映画にしかない
ことであり現実には考えられないことだった。

うつろな目に血塗れの衣服

歯をむき出しにして襲ってくるその姿は”名演技”なんて言っている場合じゃなかった

握力は人間と思えないほど強く

銃弾をもともせずに向かってくるその姿は人をさらに恐怖へ導く

囲まれていく隊員たちは一人、また一人と数を減らしていく

「クソ！こいつらそこらじゅうにいるぞ」

「いかれてるこいつら、人を食うなんて」

青ざめた顔の隊員達、もう数えるほどしか生き残ってはいなかった。密集隊形をとったのはいいが、それはどんどん囲まれていくことが目に見えていた。次々と増えていく狂人達、もう成す術がなかった。その密集体系をとっていたグループにいたカゲハが言った。

「…銃を抜け」

その言葉に隊員達はさらに青ざめた。

異国に来てその住民に発砲するなどもってのほかであったからだ。

「え…カゲハそれは…」

カゲハはとまどう隊員達を睨む。

「たとえばこいつらが民間人だとしても上層部はこの状況を分かっているはずだ」

「しかし！」

「“正当防衛だ”、すべてそれで成り立つ。お前は死にたくないだろっ？」

その一言で全員が銃を抜いた

狂人たちは霧の中から次々と現れる

「くられ！！」

隊員の一人が発砲する

だが少しよろけただけでなにくわぬ顔で向かってくる
いや、なにくわぬ顔というよりも、そんな顔の皮がないものだって
いる

「た、倒れない…？」

続けて二発、三発と体に撃ち込んでいく

「クソ！」

ついに弾がなくなるともはや成す術がなかった。

「来るな…こっちへ来るな！」

「うわああ・・・」

悲鳴、また悲鳴その悲鳴により集まっていく狂人達
次々と味方はやられていった。

だが、その中で一つのエリアだけまわりの生ける屍が地面に突っ伏
していく

そう、カゲハは冷静に生ける屍たちを倒していったのだ

頭を狙えばいい

カゲハはわかっていた。

こういう事態への対処、行動

任務を任された理由はこれにあつたのだ。

「クソ！きりがない、みんな撤退だ！聞こえてるか！？」 コマザワ
が言った

「・・・」

返事がない。聞こえるのは狂人たちの呻き声だけだった。
そう、コマザワのまわりにはもう生きている者はいない

「！」

だが少し離れた所で銃声が聞こえた

カゲハだ

コマザワはサメジマをおぶって銃声の聞こえる方へ走っていった

「カゲハ！無事だったか、撤退だ離脱するぞ」

コマザワ隊長がそういうとカゲハは顔をしかめた。

「・・・サメジマをおぶってですか？邪魔になりますよ」

その言葉に何を意味しているのかはコマザワにはすぐわかった。

「仲間は捨てられない！これはどこの世界でも一緒だカゲハ！」

コマザワは叫ぶ。

「仲間は時に裏切ります」

カゲハは冷静に言った

「なんてことを言うんだ！！」

コマザワの怒りは限界に達するその瞬間

ガバッ！！！！

いきなりサメジマの顔が勢いよく上がった
急にサメジマが起きたのだ

「だ、大丈夫なのか？サメジマ」

「そう今この瞬間も・・・な」

カゲ八には分かっていた。
それがなんなのか

一瞬ハンドガンへ手が伸びたがカゲ八はそれを押しとどめた

このときサメジマの眉間を撃たなかったのはカゲ八の敬意でもある
仲間を信じ続けた者へ対しての

「おい・・・大丈夫か・・・おい？」
なにも反応を示さないサメジマの視界には無抵抗の”餌”

カゲ八は振り返り路地裏へ走る、軽く薄ら笑いを浮かべながら
霧に消える悲鳴と共に...

任務「2」 地下の死闘（前書き）

まとめて更新するようにしました。

任務「2」 地下の死闘

街はとても静か。先ほどの出来事が嘘のように静かで、不気味であった。

路地裏に逃げ込んだカゲハは辺りを警戒しながら進んでいる

奴らは集団で動き、いちいち倒していても弾と時間を無駄にするだけだ

そんなことを聞かされていたカゲハは当初の目的地dearシティ
ーの最高峰の建造物

evolutionary school 「進化的な学校」へ
向かっている

今回派遣チームとして日本から研修に行く目的地はここだった。

この任務のなかでは集団行動だけは避けたかったカゲハはエンジン
トラブルを装いへりを墜落させた

全て計画の内だったが、この霧の中では下手に車などを運転してい
くと事故を起こす可能性があり、また騒ぎを起こすとゾンビたちが
集まってしまうという悪循環は避けたかった

じゃあ、なぜエンジントラブルを装ってまで街中へ降りたか

カゲハの誤算をした

それはこの街の霧の濃さと、ウイルスに犯された亡者たちの数である街には霧が常にあるとは聞いていたが、ここまでとは予想外だったそれといきなりT・ウィルス感染者と戦闘になるとは思っても見なかった、カゲハは霧にまぎれて消えるつもりだったのだ

「・・・しょうがない」

カゲハはため息をつきある方向へ向かった。

少し歩いてから腰に挿してある携帯端末を起動しDEARシティーの地図を表示させた

チカチカと点滅している位置がカゲハ、その先に目指している所のマークが示されていた。

「ここらへんのはず...」

カゲハは地図をみた

地図は作戦前に調べたもので、ある程度は正確なはずであった

霧の濃い中で警戒しながら進む

すると少し広い入口に【←】と書かれた看板があった

地下へ続く階段があり、矢印の横には電車のマークが記してある

カゲハは軽くつぶやく

「これだけは避けたかったが...仕方ないな」

カゲハは階段の前まで来てサーチライトを点けた

まず階段の下を照らす、暗闇の中にはまさに闇そのものと言える静寂の空間が広がっていた

(…よし)

コッッ

コッッ

靴の音が響く、地下に向かう階段の一步一步に緊張が走る。

カゲハは辺りを見回しながら進む

今進んでいるこの場所は、【セント・カルネ駅】という地下鉄の駅でこの駅からは evolutionary school へ直行の線路が伸びている

カゲハはこの駅のコンプ्यूターにハッキングし、電車呼び寄せで学校へ向かうルートを選んだ。

真っ暗闇と閉鎖空間というかなり危険なルートだが、学校までの距離はだいぶあるのでむしろ地上のほうが危険だった。

改札口と思われる所を抜け、ホームではない方向へ歩く
果てしない暗闇の中、またさらに下へ進む階段があり、壁に紙が貼ってある

そしてもう片方の手には自身のものであるう家族の写真を掴んでいた。

（そうか…）

カゲハはその様を見て理解した。彼は自害の道を選んだのだ
悪夢から開放されるために・・・

「だが無理もない…」

カゲハはモニターのほうへ行き、駅構内の電源をONにする

モニターが順番に明るくなっていった

まず一番上のモニターにはカゲハが入ってきた入り口の周辺が映し
出された

かなり散らかっているが誰もいない、

次に2つ目のモニターを見る、改札があり少数だがゾンビ達がいる。
それと同じ数の死体も

次、3つ目のモニターを見る、ここはこの部屋のすぐそばの通路で
ある。

「!？」

それには信じられないほどの大量の人影が映っていた。

まるでそれは普段からあったこの駅本来の姿のように

「・・・なぜだ？」

モニターに映っていたのはかなりの数のゾンビ達

だが、カゲハはついさっきこの通路を通ってきたはずだった

そう、カゲハは駅構内の電気を点けたことによってゾンビ達を”起こして”しまったのだ

闇の中からまた次々と現れるゾンビたち、この駅はショッピングモールと繋がっているためそこからやってきているのもいるのだろう。

「さて、どうするか」

カゲハは腰のベルトに差しこんでいた端末機を手に取りコードになく

・・・『connect ok 中枢コンピューターニハックシマス』

画面に線路図が表示される

線路の向きをevolutionary schoolへ向け、次に車両を駅に呼び戻す

「ここまで来るのに三分か、あと車両は…」

∴
∴
∴

∴…なんだ？目が覚めたぞアレ、なんでだろう俺は死んだハズナ
ノニ？ニ？

アレカユイナ
ハラヘヘタ

ウウマソウナニカイル

アソコ

イクタタタバタイイイイ
イイイイイ……

？
？！
＃

ア
ア

イタイ

イタイ

イタイ イタ イタ イ

イ

イ

…ア ア リリ ガト

「すまんな・・・借りる」

カゲハは床に転がる銃を拾う

バンツ！！

勢いよく扉を開けると食に飢えた亡者全員がこっちを向く
うつろとしたその目がカゲハに集中した。

「来い、化け物」

一斉にその目は生きた血肉を持つ者へ向けられ、その空腹を満たすべく歩きだす

そう

あくまでも（歩き）だすのだ。その者達は半径五メートル以内に近づいたならば容赦なく二度目の死を迎える

その風景はまるであの世へつながる送り火へ群がる死霊のようだった

その者は両手に銃を持ち、通る道すべてが死の道と分かっているが
ら進んでいく

カゲハはつい先程一人の男を生ける屍という呪縛から解放した。だが男にとってはそれが救済なのである

カゲハの手には男を現実という名の悪夢から解放させた銃
そしてその男を醜い亡者という呪縛から解放させた銃が握りしめられて
いる

血肉を求める亡者たちの動きはその十字架を背負った青年には遅すぎた

弾丸眉間に貫き、亡者は倒れる。それを踏み台にしてまた亡者が襲いかかるうとするがまたその亡者の頭に穴が空く。

頭の中で自動的に数えられていく残段数、片方がゼロになったら片方のリロードのため銃を撃てなくなる。だがその瞬間にカゲハは亡者へ強烈な蹴りを入れひるませる、その瞬間にリロードを繰り返してた。

「よし」

ホームに着いたがまだ電車は来ていない
だがゾンビたちは限りなく溢れてくる

カゲハは時計を見る

予定の時間には成っている。だが秒針はまだだ

「あと15秒」

ゾンビたちはだんだんカゲハを追い詰めていく
それでもカゲハは打ち続ける

「あと10秒」

カゲハの肩が壁についた

「9秒」

違うドアからもゾンビたちがあふれてきた
そして囲まれていく…なぜか点けたはずの電源は消えハンドガンか
ら発せられる火花が頼りになる。

「8秒」

距離が縮まっている

見えるものは全て自分に向けられる手、手、手

「7秒」

あと五メートル

もはや円のように囲まれ、逃げ場などない

「6秒」

あと4メートル

たまに小走りでくるゾンビを蹴り飛ばす。だが亡者の群れはそれをまた押し返す。

「5秒」

3メートル

常人なら発狂しているレベルの囲まれ方である。だがカゲハはあきらめない。

「4」

2メートルまできた

ホームにまだまだなだれ込む亡者たち

「3」

手が伸びてくる
もう捕まる。

「2」

カゲハは手元の複数ある閃光手榴弾の信管を抜いた

「1」

光が瞬くまに広がっていく

体制を低くしてゾンビたちの間を抜ける
カゲハはフックロープを投げた。

キーーーーー

ガタンガタン、ガタンガタン

闇を照らす光と駅構内を揺らす激しい音を出す貨物列車がもうスピードで通り過ぎていく

セント・カルネ駅のホームには大量の亡者たちが溢れかえっている

もちろん生きているものなど誰一人としていない

[illegible]

ガタンガタン、ガタンガタン

生命など存在しないその闇の中で数週間ぶりの光が通り過ぎていく。線路を揺らし、トンネルの中を音で反響させながらその列車は走っていく

カンカンカン

梯子を降りていくと貨物の間には軍用の車両がある、カゲハはコンピューターにハックした時に選択した車両だった。

カゲハは自分の持つハンドガンを上に向け引き金を引いた。

カチン！

先ほどの戦闘でもはや弾など撃ちつくしたので

空の音が響く

中に入り、扉を閉めた

車両の中には武器と弾が豊富に置いてあった

カゲハはショットガンを手に取る、弾は十分に入っていた。型はM

19でカゲハはそれを腰の後ろに掛ける

次にグレネードランチャーを取る。オプションパーツにマシンガン

がついている、普通なら逆なのだがこのモデルは少し違った。弾を充分に補充し、予備の弾も装備する。

他にはないかと辺りを見回すと、奥の方にノートパソコンが置いてある

パソコンの裏側には大きくアンブレラのマークが印しており、カゲハはそれを起動させまた端末機を差す

すこし時間が経つとパスワードを解除されパソコンのデータを見れるようになった

「！」

データのリストに「monster data」と表示されてる
ファイルを開くと写真付きで説明が載っていた

ハンター

爬虫類をベースとし

B・O・Wとしては優秀なほうであり

ある程度命令が理解できる

緑色の皮膚とその発達した爪が特徴的であり動きはかなり素早い種類が多数ある

リッカー

t-ウイルスの侵食によりその体には新しい筋肉が出来始めている剥き出しの脳が特徴でその爪はかなり巨大化しており聴覚だけで獲物を把握する

カエルのような舌は強力な武器でもある

公式の $B \cdot O \cdot W$ ではないがその危険性からここに表示させる

カゲハは一体ずつ見ながら過去を思い出していた

カゲハは昔、アンブレラヨーロッパ支部の社員であり研究部門のほうにいた事もあった

て、ウイルスの実験にも少し関わり

凄惨な現場も何度も経験した

カゲハには兄がいた

兄は一種の天才と言われる者だった

兄の口癖は

「私より天才は沢山いる、ただやれることはできるだけやってみせるさ」と言って研究主任にも務めたこともあり

人々には「あのウィリアムに並ぶんじゃないのか？」とも噂されたこともある

だが、その天才は一つだけミスを犯した

新しいウイルスの開発に着手し、ついに完成させたまではよかったが彼にとつて開発したウイルスは脳に負担をかけずに肉体を活性化させ超人的な動きをするはずだった

天才の計算は一つの小さなミスを犯しその小さなミスから大変な答えを導き出した

数学の計算においても一つ間違えればすべてが狂う……これも同じだった

結果、本人が感染

研究室内でバイオハザードが起きる

直ちに武装部隊が突入しなんとか制圧された。

だがその制圧した武装部隊の中にはカゲハがいた

これは社内で極秘にされ、もう一つのウイルスサンプルは回収された
違う支部に移されて研究対象にされている。

カゲハはこの機に社のことの黙秘を条件にアンブレラを辞めた

そのあと兄の家を訪ねた

膨大な研究資料の山が重なっているその机、その引き出しを開けると「カゲハへ」と記す紙があった。開けるとそこには一通の文章があった。

それにはこう記してある

「この文を読むのがカゲハだとしたらそれは私が社に捨てられ殺されるか自害をしている頃だろう。カゲハじゃないなら読んでも意味はないだろう。ここに書いてあるのは研究内容など何も関係ないことなのだから。」

私はこの会社に務めて尽くしてきて気づいてしまった、私は 悪魔
なんだと言うことを人々に破滅をもたらす元凶ということに感じ
てしまった。

私は天才ではない、ただの人間なんだ
そう、アンブレラは気付くだろう自分達がした愚かさを

この手紙を読んでいるのがカゲハということ願う

カゲハ、君だけは人道を踏み外さないでくれ君は私以上に天才だ、いやカゲハは私よりも全て勝っているはずなんだ

自分から目立たとうとしない君をいつも疑問に思っていた、私は今理解した

私は自分を見失ってしまったのだ

そしてもう引き返せない

カゲハ、君だけは自分を信じる

君は賢い、必ず世に光を当ててくれ」

兄の葬儀が終わったあとラクーンは消滅した

そのあとアンブレラ社の株は大暴落し事実上倒産する形になる

しかし、アンブレラは残っていた

同じアメリカでアンブレラがなくてはならない存在となってしまう街が

ラクーンよりも数倍の人口で、そのDearシティーは決して目立たないようにその街にはアンブレラが深く根付いてしまったのだ

そして今、このDEARシティーでバイオハザードが起こり

カゲハは今その街にいる

カゲハは考えた

ここも消滅するだろうか

いや残るだろう

街の人間は衛星から見張られ

連絡をしようともあのヘリの時ように妨害される

そういう街なのだ

そう、この街はある男に実験場にされたのだから

カゲハはそのことをパソコンの映像を見ながら思い出していた

するとふと、一番下の方に 最重要機密 と表示されている所を見つけた

それにはプロテクトがかけてあり少々時間がかかるようだ
ハッキング端末に解除を任せ時間を見る

「あと10分か…」

解除にはまだ時間がかかりそうだ

ガン

「!？」

何かが屋根の上に乗ったような音がした

カゲハは銃に手をかけ
ハシゴに登る

パソコンの方を見ると解析は終わったようだ

だがカゲハはそれを見ずに登っていった

パソコンの画面に表示されたのは《G》というアルファベットが表示されたウィルスデータ

その下に赤い文字で

「もし、感染者に遭遇したら直ちに撤退すべし命を無駄にするべからず」

だが今、カゲハはそれと対峙している

逃走などできない状況で…

[illegible]

闇の中にジッと自分を見つめる巨大な「眼」がある。まるで自分の心が見透かされたように

「
…
なんだあれは」

それの体は有り得ないほど肥大化していて胸の所にある巨大な眼がカゲハを凝視している。

両腕が体の数倍の長さで、人と思えない新しい筋肉が出来上がっていた

指に見えるあれは人間の腕ほどある

そしてその指の先に付いている爪は30センチはあるだろうか

だが、かろうじて人間の頭が見えるがその巨大な体に埋め込まれているようにも見えた。

カゲハは銃を構える

「ウウウオオオオオオオオ！！！！」

怪物は身がねじ切れそうな放吼を上げる

ガタガタと足下が揺れ

迂闊に動けないことを警告する

位置的には怪物が運転車両の方にいるため、車両を切り離すわけには行かない

「やるしかないのか」

右手のTSW1013 (Smith & Wesson) と左手のM1911AI (Omega) を連射する

「・・・」

よろけもせず、その怪物に弾丸が肉に食い込んだだけでさして効いているようには見えない

怪物が近づいてきた。ゆっくりした動きだが、けっして油断はでき

なかった。

カゲハは撃ち続ける。腕、肩、頭、腹、そして巨大な目玉、どす黒い液体を吐き出すだけでめり込む弾丸をまったく意に介していないようだ。

カゲハの目の前まで来ると怪物は腕を振り上げる。しかし、カゲハはすばやく脇をすり抜け回避する。振り上げた腕は空を切り、怪物はすぐさまカゲハの方を向いた。

ガチャン

弾が装填される音と共に、そこに待っていたのは散弾の嵐であった。

一発撃ち、怪物は怯む

その隙をカゲハは逃さなかった

二発目三発目と撃ち

怪物の距離を離していく

「グオオオオ!!」怪物は腕を広げ怒号を上げる

カゲハはいつきに距離をとった。その広げた腕が仇となる、がら空きのボディにグレネードランチャーが撃ち込まれる

「グオオオオオ!!!!!!」

怪物は吹っ飛び、電車から転げ落ちる

だが、怪物は屋根のへりを掴みまた上がるうとした。

「しつこいやつだ……」

カゲハはそこにグレネードランチャーを撃ち込む

「アアアア…」

怪物は燃え上がり消えていった。

スピードを上げながら地下を突き進む電車の上にたたずむカゲハ

カゲハはフウツとため息をつき、武器庫車両に戻る
先ほどのロック解除がされているかパソコンを見た。

「?」

パソコンの電源が消えている

もう一度起動するとパソコン内のデータが全て消えていた

「チッ!」

何者かがパソコンに侵入し、全て削除したのだ

幸い接続した端末機はなにもされていなかったが、モンスターデータなどは閲覧不可能となっていた。

電車の速度がだんだん落ちてくる。

どうやら、当初の目的地 evolutionary school
に近づいてきたらしい

カゲハはショットガンとグレネードランチャーを装備して外へ出た。

屋根に登り、風に当たりながら先程戦った怪物のことを考えていた

「あれは何だったんだろうか」

ふとカゲハは思い出す

あの巨大な目、ハンドガンをもろともしない強靱な体、ふとアンプ
レラにいた頃が頭に横切った。

（ウィリアム・バーキンが新型のGーウィルスを完成させたと聞いたことがある、もしかしたらあれなのかもしれない）

そんなカゲハの乗る電車はだんだんと速度を落とし、駅に入っていた
った

ウィーン

ガタン

プシュー

駅のホームは天井の薄暗い明かりに照らされている

カゲハは銃を構えながら電車を降りた。

ゾンビがいないことを確認して階段のほうを目指そうと歩きだそう
としたその瞬間

ペタッペタッ

奇怪な足音がする

ペタッ

ペタッペタッ

その音のほうを向くと、異形の影が駅のホームの壁をはいずり回っていた。

そう、T・ウィルスの変異体【リッカー】である。

何かが待ち構えていることは予想はしていたが、一つ予想してなかったことが起きた。

リッカーは一体ではなく多数いるのだ

2体は天井に張り付き

1体は地面を這い

もう2体は横壁に張り付いている

（五体か…これはまずいな）

ハンドガンを手に取り、息を殺す。

できるだけ静かに前に進んだ。いくら耳が退化したといえどその研ぎ澄まされた感覚で気づかれているのだ。

計5体の変異体を相手取る覚悟を決め、カゲハが銃を構えた瞬間

バキン

ベキベキベキ！

急に後ろの車両が崩れた。

（なんだ…？）

すかさずリッカー達が音に反応してその方向へ全力疾走する。

ガコ

ベキ

グチャ

バキ

奇怪な音を立てながら、リッカー達は何者かの圧倒的な力によって潰され、切断され、握り潰されてしまった。

薄暗い明かりの中に巨大な目が3つ

血が車両と通路に飛び散っている。

その巨大な目は、肩と胸と足に付いていた。そして、全ての目はカゲハを凝視している

カゲハはその全部の眼に目があった。

その瞬間、カゲハは何か全身に悪寒が走る。自分の中の全細胞が逃

げろと言ってる気がした

「グウアア・・・ウオオ・・・」

怪物はいささか苦しんでいるように見える

怪物は全身黒焦げで、所々肉がえぐれていた。

特徴からは、先ほど戦った怪物なのだろうか
その醜い姿はもはや人間とは言い難い

バキン

バキン

怪物の体から骨が変形していくような音がする
(なんだ...)
だが3つの目は依然としてカゲハを見てる。

音が止み、一瞬間が空いたその瞬間

「！」

「グウオオオ！！！」

G - ウイルス特有の骨格変化、変異が始まり、たった今終えたのだ。
Gの怪物は雄叫びを上げ、巨大化していく

そう

人間の体はもうそこにはなく別の生物になっていた

とうに体長はを2メートルほど大きく

背中から腕が2本

「メキメキ」と効果音つきで這い出してきた

さらにどこからその遺伝子情報を手に入れたのか尻尾まで生えてきてる

多分、体を支える為なんだろうか

大きな翼のような腕は先程のようによけられる気がしない

「化け物め……」

カゲハはグレネードランチャーを構えた。威圧感を全身で感じ、Gの怪物を睨む

Gの怪物はゆっくりと近づいてくる。

背中から生えた巨大な腕を前につき、後ろ足はその体を支えられるように巨大な鉤爪がそのアスファルトの地面を掴んでいる

「……」

カゲハはマシンガンの引き金を引いた。ガガガガと音を立てマシンガンは躍動する、多量の弾丸が肉に突き刺さった。

が、先ほどのように表面の肉がえぐれるだけで痛みなどまるで感じてないようだ

Gはだんだんと速度を上げて直進する

ダンッ！

そんなカゲハはGへ突っ込んでいく

この化け物には今逃げてもまた必ず対峙することはわかっていた

カゲハにとって執拗に追われることのほうが数倍厄介なのだ

Gはカゲハを背中から生える巨大な手を振り上げカゲハを掴もうとした。

だがその手は強い衝撃で弾かれる。ショットガンによる散弾が手のひらを直撃した。

カゲハは即座にショットガンを腰に固定し、背中に刺さっているグレネードランチャーに切り替える。

怪物の懐に入った

カゲハはグレネードランチャーを構え、超至近距離で怪物の頭へ狙いを定めて股の間をスライディングする
そして、ギリギリのタイミングで引き金を引いた

すさまじい音と共に燃え上がる黒煙

クリーンヒットしたことはカゲハの目でしっかり確認できた。

カゲハは股の間を抜けて立ち上がり
燃え上がるGの怪物のほうを振り向いた。

モクモクと黒煙が上がっているところをみるとどうやら頭を仕留めたようだ

「？」

だがGの怪物はグレネードランチャーを食らった体制から微動だにしていなかった。

（なぜ倒れない？）

まさかと思い再びグレネードランチャーを構える。
黒煙を上げていたGの怪物はこっちを振り向いた。

「クッ」

黒煙を上げているのは背中から生えた腕だったのだ
防いだほうの手はぐちゃぐちゃになっていたが他は無傷。

（防がれた）

「ウオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

咆哮と同時に腕を広げ、憤怒を表す

胸の眼はギョロギョロと回りを見回し最後にカゲハを見た

パキッ

パキッ

背中から生えた腕がすごいスピードで再生していく
それと同時にGの肌の表面が鋼のように硬質化していた。

カチッ

カゲハはグレネードランチャーを撃った

弾は勢い良く飛んでいき、G生物の肩に当たる
当たったところは黒煙を上げ、ジャストヒットした……はずだった

しかしGは何事もなかったようにこっちを見ている
弾が当たったところは煙が上がっているものの、たいしたダメージ
にはなっていないようだ

（これはまずい……！）

ダンッ！

床を撒き散らし、Gが飛び上がる

この駅の天井は約十メートル
それを容易に飛び越える勢いだった

ガッ！

G生物は天井に掴まった。
そしてカゲ八を向き、跳躍体制に入った。

（まずい…！）

バンッ！！

G生物はすごい勢いでこっちに飛んできた

カゲ八はダツシュする

カゲ八の頭上からは獲物を狙う叫び声、そして肌にヒシヒシと感じる殺気が体全体に伝わってきた

轟音と共にG生物は床に着陸し、その勢いで床がめくれ上がる
コンクリートがめくれ上がり、大きなクレーターがその場で起き上がる。

（危なかった…それ以上にこの戦闘力は異常すぎる……どうすれば）
カゲ八は間一髪よけてたがあれに当たっていたと思うとさすがに恐怖を覚えずにはいられなかった

「まずいな…」

カゲ八は電車のほうへ走る、それはG生物がカゲ八へ突進を開始したからである
ちょうどG生物はカゲ八より駅の出口のほうに着地していて車両のほうへ追い立てられるかたちになった

「ガアアアアア！！！」

背中から生えた腕を使い、床を蹴散らしながら追ってくる

（まずい…追いつかれる！）

カゲハは手榴弾を無造作に取り出し、4ついつきに栓を抜き床に転がした

しばらくして背中にすごい衝撃が走る

カゲハは爆風で飛ばされ武器車両の前に投げ出された

「！」

すぐさま起き上がりG生物を見る

G生物はひっくり返し、また起き上がろうとしてる

その隙にカゲハは黙って武器車両に入っていた

なにか使えるものはないかと辺りを見回す、いつG生物は起き出してこっちにやってくるかはわからなかったのであまり時間はない。

「！」

（なんで気付かなかったんだろう）

そこには三点連結式のロケットランチャーがあった。

砲塔、スコープ、さらに連弾発射用の大型マガジン

カゲハはすぐさま組み立て外に出る。

G生物は車両から出たカゲハを見るとすごい勢いで突進を開始した

「ゲウオオオ！！！！！！」

「死んでくれ化け物・・・」

引き金を引き、G生物にロケット弾が飛んで行く
G生物は背中から生えた腕で防ごうとした。だが、さっきと比べものにならない衝撃がG生物を襲う

「やったか？」

煙を上げているG生物を見る
ボタボタと血が滴り、G生物は苦悶の表情を浮かべた

するとミチミチと腕の間接部分が崩れだし、腕から血を噴出しながら背中から生えた腕が床に落ちた

「まだか…ロケット弾を食らって生きてるとは」

カゲハはもう一度弾をセットした。
G生物はゆっくり近づいてくる。

「さあ、死ぬんだ・・・」

カゲハはそうつぶやいてロケットランチャーを肩に背負い、標準スコープへ目をあて引き金を引いた

もう一度ロケット弾が飛んで行く

ダンッ

Gは飛び上がった

「!？」

飛んでいったロケット弾は奥の壁に当たってしまった

「まずい・・・あと一発」

あと一発しかないのはさすがにつらかった

先ほどG生物に撃ち込んだロケット弾はG生物を倒しきれなかった
ということは下手に違う所に撃ち込んでしまうと勝ち目がなくなっ
てしまうことを意味していた

しかも2発目はよけられるという失態まで犯した、これはG生物が
ロケット弾を警戒しているということにもとらえられる。

「このままでは…まずいな」

ブンッ

カゲハはロケットランチャーを投げた。

ガラガラと音を立ててロケットランチャーは車両のほうに転がって
いった。

ダンッ！

それと同時にGの怪物は天井からカゲハめがけて飛ぶ、それはカゲハが床を蹴ったのと同じ。

めくれ上がる床そして起き上がるGの怪物。カゲハはするときすぐさま起き上がりGの怪物の後ろに回っていた。

カゲハはマシンガンの引き金を引いた。効いていないようだったが誘導には充分だった。

Gの怪物はカゲハめがけて突進する。振り上げた爪がカゲハを狙っている。

しかしカゲハはそれをよける。そしてまたスライディングで怪物の後ろへ。

だが先ほどとは違った。Gの怪物の懷に手榴弾が置いてある、それはすぐさま爆発し破片がGの怪物の目玉に突き刺さる。

「ウガアアアアア！！！！」

咆哮を上げながらひるむGの怪物、カゲハはすぐさま投げ出したロケットランチャーのところに行きスコープで怪物への標準を定める。
「さあ…終わりにしよう」

カゲハがそうつぶやき引き金を引こうとした瞬間。

ダンッ！

再び怪物は飛び天井に張り付く、怪物自身その身が危険にさらされていることを察したのだろう。

「チッ！」

天井に張り付く怪物に再び標準を定めるがそこからだと狙いが定めにくかった。

だが、カゲハはあることに気づく。
武器をマシンガンに持ち替え連射した、一つ腕がなくなっているのもう片方の腕を狙う。

バランスを崩すGの怪物、カゲハは引き金を引き続ける。

するとついにG生物はバランスを失っていきカゲハを飛び越え武器車両に逆さまに落っこちた

「そついう運命だ」

武器車両のほうへロケットランチャーを向けた

これがラストの弾だった

「哀れなGーウイルスに犯されたものよ、安らかに眠ってくれ」

カゲハは引き金を引く

ロケット弾は勢いよく飛んで行き、武器車両に着弾した。そして数々の弾薬に誘発して巨大な爆発が起こる

その爆風の大きさと燃え上がり方を見ると、さすがにG生物は木っ端微塵になっているだろう。

カゲハは炎の中で苦しみの声と影が見えた

「……」

無言でカゲハは出口に歩き出す

そしてカゲハは地下の死闘から生還を果たしたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1036y/>

BIO HAZARD evolutionbreak[DEAR FILE]

2011年11月1日10時23分発行